

# 安倍の政治的言動に見る「反知性主義」と その社会的背景

由木 操

2015年9月

編集・発行 民主主義的社會主義運動 (MDS) 理論政策委員会

## 目次

- |                             |                               |
|-----------------------------|-------------------------------|
| はじめに                        | 4 「考えること」を「感じること」に<br>解消する危険性 |
| 1 「反知性主義」の基本的特徴             |                               |
| 2 「他者」なき心情の独善主義             | 5 「反知性主義」の社会的源泉               |
| 3 「反知性主義」の基礎にある<br>「思考の短絡化」 |                               |

## はじめに

日本の論壇や政治のあり方の「劣化」を特徴づけるのに「反知性主義」という言葉が用いられるようになったのは、この数年のことである。当初この言葉は、幅広くバブル崩壊期以降（あるいは、もっとスパンを長くにとって、高度成長期以降）の日本社会における実利的、短絡的な思考様式にもとづいた、反「教養」主義的な精神の台頭を批判的に特徴づける意味合いも有していた。つまり、この言葉はどちらかといえば、精神や文化全般の「劣化」を特質づける用語であった。だが、最近「反知性主義」はもっぱら、日本政治の、とりわけ安倍晋三とその取り巻き連中の危険な政治的言動の特徴を言い表わす用語として多用されている。週刊誌（『週刊朝日』2015年8月21日号）までが、「安倍政権の反知性主義」という記事を書くようになってきている。だが、こうして多用されているにもかかわらず、この語の意味するところは不明瞭で、漠然としているように思える。「安倍政権の反知性主義」とは、いったい何を指すのか。

安倍の「反知性主義」とは、安倍晋三に常識的な意味での「知性」が欠けているということを目指すというよりも、むしろ彼とその「仲間たち」の政治的言動が旧来の保守政治とは際立って異なるいくつかの危険な特徴によって特質づけられることを指摘し、その危険性を批判するための用語である。たしかに彼らの最近の多くの「暴言」はその「知性」（ものごとを筋道立てて考え、それを説得的に表現する能力）の存在を疑わせるに足るものである。しかし、問題はそこにあるというよりも、そのような言動が人びとに通用する、あるいはそれで人びとを納得させられると思いついでいる彼らの考え方のほうにこそ、「反知性主義」が潜んでいるのである。

もうひとつ留意すべきことは、「反知性主義」は安倍政治に突発的に現われた特異現象ではないということである。それは、長い間にじわじわと日本の政治と社会に浸透し、形成されてきたのだと言える。安倍はそれを最も顕著なかたちで体現しているのである。だとすれば、問題を安倍の政治的言動の批判にとどめず、「反知性主義」を生みだしている社会的源泉というべきものを考えねばならないであろう。

以上のような観点から、まず、安倍の政治的言動に見られる「反知性主義」を具体的事例に即して検証してみる。そのうえで次に、われわれが軽視してはならない、現代社会に「反知性主義」的傾向を醸成している現実の様相を明らかにしておきたい。

### 1 「反知性主義」の基本的特徴

まず、とらえどころのない「反知性主義」という用語を輪郭づけることから始めよう。「日本の

政治が急速に反知性主義化している」と警鐘を鳴らしている評論家の佐藤優は、「反知性主義」を「実証性や客観性を軽視もしくは無視して、自分が欲するように世界を理解する態度」と定義している。彼はさらに、「倫理性、他者との関係などを等身大に見つめる努力をしながら世界を理解していくという作業を拒み、自分に都合が良い物語の殻に籠るところに反知性主義者の特徴がある」とも述べている<sup>1</sup>。歴史学者の與那覇潤もほぼ同じように、「反知性主義者」は『現に俺にはこう読めた』という手前勝手な解釈を、一度も吟味せずに、おのずと内外に通用するものだと言っている<sup>2</sup>。つまり、彼らが共通して指摘しているのは、「反知性主義者」の主張は「客観性」や「実証性」を欠いており、独りよがりの主観的結論だけがある、という特徴である。

では、その主張が「客観性」や「実証性」を欠いているのはなぜなのか。それは、「反知性主義者」は或る（政治的）主張をする際にも、多くの人々が納得できる「客観的根拠」を示さない、というよりも示す必要性を感じていないからであり、それゆえ話の「論拠」と「結論」をつなぐ「話の筋道」というものを軽視、無視して、ただただ「手前勝手な」結論だけを一方的に、飽くことなく繰り返し主張するからである。ここに、「反知性主義」の第1の特徴が認められる。

圧倒的に多くの憲法学者が「安保法制」を学問的根拠にもとづいて「違憲」だと断定しているにもかかわらず、安倍は、なんの根拠も対置せず、あるいはその根拠をころころと変えては（ときに「砂川判決」、ときに「国連憲章」をもち出し）、「蛙の面に小便」のごとくにあくまで「合憲」だと言い張って恥じない。このように論理的一貫性や論理的根拠をまったく意に介さないところに、その「反知性主義」の特徴が如実に表われている。また、衆議院での「安保法制」の審議時間が100時間を超えたにもかかわらず、多くの人びとが「なお説明不足」だと判断しているのも、安倍が「安保法制」の妥当性について実証された客観的根拠をなにひとつ示さず、居丈高に結論だけをくり返しているのを人びとがよく見ているからである。論理と根拠の足りないところを威圧的なもので補おうとするのも、「反知性主義」の特質である。安倍が国会審議で、「私の責任において」とか「絶対に」あるいは「断じて」等々を連発するのは、その具体的現われである。「論理」の足りないところは「気合」で、というわけである。

「反知性主義者」が稚拙な比喩やたとえ話をよくもち出すのは、そうした「論理」と「論理的根拠」の欠如を補うためである。安倍は、懸案の事柄の複雑な全体を理解させようという気持ちを端からもたず、むしろその複雑な連関を隠すために、「誰にもわかる」単純な「たとえ話」をしばしばもち出す。そして、それで人びとを納得させられると本気で思っている。集団自衛権の行使が、「普段からお世話になっている隣の家が火事になったら、助けに行く」ことにすり替えられる。もっと有名になった「たとえ話」はこうであった。「喧嘩が強くて、いつも自分を守ってくれている

<sup>1</sup> 佐藤優『知性とは何か』祥伝社新書、2015年、16ページ。

<sup>2</sup> 内田樹編『日本の反知性主義』晶文社、2015年、161ページ。

友達の麻生くんが、いきなり不良に殴りかかれたときには、一緒に反撃するのは当たり前ですよね」。

2015年7月15日、大阪駅前で行なわれた反「安保法制」の集会で、ひとりの女子学生がこの「たとえ話」を引いて、こう反論した。「このたとえを用いるのであれば、この話の続きはどうなるのでしょうか。友達が殴りかかれたからと、一緒に不良に反撃すれば、不良はもっと多くの仲間を連れて反撃をしてくるでしょう。そして、暴力の連鎖が生まれ、不必要に周りを巻き込み、関係のない人まで命を落とすことになります」。彼女は、さらにこう続けている。「なぜ、彼らが不良にならなければならなかったのか。そして、なぜ友達の麻生くんに殴りかかるような真似をしたのか。その背景を知りたいと検証し、暴力の連鎖を防ぐために、国が壊れる社会の構造を変えること、これが国の果たすべき役割です」。事柄の全体的連関を説明せず「一断面」だけを切り取り、「わかりやすく」説明した気になっている首相と20代の学生、このどちらが集団的自衛権のもつ意味合いを具体的かつトータルに把握し説明しているか、それは一目瞭然であろう。つまり、「反知性主義」はものごとの全体を単純化し、矮小化するのである。

## 2 「他者」なき心情の独善主義

先の「たとえ話」には、また別の「反知性主義」の特徴が隠されている。安倍が先のような「たとえ話」をもち出すとき、彼は「隣の家の火事」に手助けをするのも、「麻生くん」に加勢するのも、「人間なら当然のことだろう」というきわめて単純な「自然心情」に訴えている。彼は、学問的知見や込み入った理屈よりも、人間の自然なつまり理屈抜き「気持ち」「心情」をずっと重要視している。かくして、理屈抜きの「心情」が「理屈」（論理の一貫性や論拠の必要性）を圧倒しようと信じている点に、「反知性主義」のもうひとつの特徴がある。理屈抜きの「心情」に訴えるのは、ネット右翼の常とう手段である。

近年の思想・精神状況を「ヤンキー化」という用語を駆使して分析している精神科医の斎藤環は、こう述べている。「さすがは『瑞穂の国の資本主義』という迷言を吐いただけのことがある」安倍には、「やはりヤンキー的としか言いようのない体質があって、思想的な一貫性はあまり重視していない。ロジックがなくてポエムだけがあるんでしょう」<sup>3</sup>。この「ポエム」とは、独りよがりな心情によって織りなされた主観的「物語」のことである。この心情の「物語」には、「実証性」も「客観性」もまったくふくまれていない。つまり、「論理」よりも「理屈抜きの気持ち」、これが「反知性主義」の第2の特徴である。

<sup>3</sup> 斎藤環『ヤンキー化する日本』角川書店、2014年、144ページ。

さらに、上記の論者たちが共通して指摘していることがある。「反知性主義者」は、立場や見解を異にしている「他者との関係」を無視し、「自分に都合の良い物語」がそのまま「内外に通用する」と思い込んでいることである。そのような態度は、安倍の歴史認識や沖縄・辺野古基地問題にまごうことなく確認できる。

安倍には、侵略戦争で言葉を絶する被害を受けた「被害者」（「他者」）の思いを容れる余地がまったくない。それゆえ「謝罪」と「反省」はいつも空疎で、人の心を打たない。また、国家によって戦場に駆り立てられ、非業の死を遂げた無数の人びととその遺族の想いの一片も安倍の心には届かない。その想いは、「自らの命と引き換えに国を守った英霊への尊崇の念」に吸収されてしまう。沖縄はいまや安倍にとって、自分のつくろうとする「物語」の埒外にある「他者」である。戦後も本土の「捨石」にされつづけてきたことに対する沖縄県民の怒り、プライド、尊厳に思いをはせることを、安倍はまったくしない。そうである以上、中国や韓国そして沖縄との「対話」もこれまた、「独りよがり」のくり返しの域を出ず、内容空疎なものにならざるをえないであろう。かくして「反知性主義者」は、「他者」や「他者との対話」の必要性を認めない独りよがりの「独善主義者」なのである。これが、第3の特徴だと言える。

### 3 「反知性主義」の基礎にある「思考の短絡化」

以上に挙げた3つの特徴に共通して、それらの根底にあるのは、「思考の短絡化」とでもいうべき傾向である。(政治的) 現実には、たいてい何重にも重なりあった諸要素が織りなす複合体である。それは、原因(論拠)と結果(結論)をつなぐ何重もの関係の全体である。だが、「反知性主義者」はこの複雑な全体的連関を考えることを意図的に避け、ただ単純で「わかりやすい」結論だけを求める。すると、ことの全体的連関は消え失せ、単純なイメージ(心情)だけが結論として突出してくる。この結論には客観的、実証的な論拠も必要ではない。それは、独善的な心情だけを拠り所としているからである。したがって、そこには「他者」のまなざしも存在しない。

このように、ものごとの全体的連関を無視し、複雑な関係の一つひとつの筋道を考えることを忌み嫌い、それを「学者の理屈」だと切り捨て、独善的主張をくり返すような態度、これが「思考の短絡化」「思考のショートカット」と呼ばれるべきものである。安倍の言動に認められる「反知性主義」的諸特徴の基礎にあるのは、こうした態度であると言える。国会でおよそまともな「議論」が成立しないのも、この短絡化による結論の断定のためである。ただしそれは、安倍の専売特許ではないことを思い起こさねばならない。小泉内閣がしかけた、「郵政民営化、イエスカノーカ」というシングル・イシュー選挙もまた、こうした国民全体を支配した「思考の短絡化」に支えられていた。この「思考の短絡化」こそ、これまたネット右翼の言説空間を支配している原理であるこ

とは言を俟たないだろう。

#### 4 「考えること」を「感じること」に解消する危険性

「反知性主義」は単に安倍の政治的言動に限られたものでなく、一定の社会的・政治的状況のもとではかなり普遍的なものである。かつてドイツの哲学者 J. ハーバマスは、ナチス・ドイツの思想的源泉のひとつとなった F. ニーチェの思想の反動性を次のように批判した<sup>4</sup>。ニーチェは「趣味判断」を「価値判断の、すなわち彼のいう価値評価のモデルへともちあげ」ている。「趣味判断」とは、或ることが「美しいか、醜いか」、あるいはそれが「好きか、嫌いか」についての判断である。この種の判断は、それが他者に共有されないまったくの主観的・感覚的判定に基礎を置いているかぎりには、「理屈」と「理由（論理的根拠）」を必要としない。私がそう感じていることに「理由」はない。「理由」よりも、私がそう「感じていること」が重要なのである。それに対して、或ることが「真理か、虚偽か」の「真偽判断」の場合にも、或ることが「善であるか、悪であるか」の「道徳判断」の場合にも、「なぜ、そう言えるのか」を説明する判断根拠の提示が不可欠なのである。われわれの日常の言動を考えてみても、そうであろう。

するとハーバマスの批判の要点は、ニーチェが判断の「論拠」や「理屈」を必要とする「真偽判断」と「道徳判断」の一切合切を、それらを必要としないような純感覚的「趣味判断」に、つまり「感じ方（心情）の問題」に流し込んでしまっていることにある。そうになると、もはや筋道立ててものを考えたり、「他者」と議論したりする必要なぞない。重要なのは「考え、それを他者に説明すること」ではなく、「私がどう感じているか」なのだ。「真偽判断」と「道徳判断」を独りよがりの「趣味判断」に解消すること、これは、論理の筋道や論拠を説明することを忌み嫌い、単純な心情的結論に訴える「反知性主義」の基本的特徴と本質を同じくしている。

ハーバマスはその危険性をこう述べている。「ニーチェは＜趣味＞を王座に据える。趣味は『味覚〔感覚〕による肯定と否定』であり、真と偽の、善と悪の彼岸にあって、『認識』の唯一の器官である」。その結果、「価値評価に際してのイエスかノーかの態度決定のうちにはもはや妥当性請求は表明されておらず、ただまったくの力の要求のみが現われてくる」。「論拠」も「論理の一貫性」も問題にならず、したがって「熟慮」も「他者との対話」も問題にならないところ、そこには「ただまったくの力の要求のみが現われてくる」のである。

「力の要求」とは、考えや立場を異にする「他者」に対して、相手を理解しようとしたり、自分を理解してくれることを求めたりすることを拒否し、理屈なき心情的結論を居丈高に強要すること

<sup>4</sup> J. ハーバマス『近代の哲学的ディスクール I』岩波書店、1999年。

である。これは、安倍やその取り巻き連中、そしてネット右翼の言動に典型的な態度である。「思考の短絡化」は、このような「力の要求」の発現を容易にし、それを助長することに留意しなければならないだろう。

## 5 「反知性主義」の社会的源泉

「反知性主義」が、安倍の政治的言動のみならず、日本の政治全般に強まっているのには、それなりの理由と背景があると考えなければならない。その急速な台頭の源泉は、突き詰めれば、近年における日本の格差社会の急速な進行が生み出している社会的現実にある。格差の拡大は、社会に対する漠然とした不満と不安をかつてなく増大させている。格差の拡大は、とくに青年層に自分の生活の将来展望や計画をますます描きづらくさせている。

こうした展望の喪失から起こってくる、現実に対するいらだち、不満、不安は、ついつい「手っ取り早い」打開策を求めがちになる。現実を変革するために、社会全体を見渡しながらか、格差と貧困の（目に見えない）原因を探り、一つひとつ筋道立ててその解決策を考え、変革の展望をトータルに描くこと、それはかなり高度な知的作業であり、なかなかしんどいことである。それよりも、単純でわかりやすい「即効薬」を求めるほうが楽である。だが、単純な「即効薬」とはたいてい権力者に都合の良い解決策である。そして、不満や不安が強くなればなるほど、複雑な全体を考えることをあきらめ、安易な解決策にすがろうとする傾向は強まる。それにつれ、批判的精神は失われ、「理屈」抜きで断定的「結論」（「力の要求」）への同調性だけが強まる。それが政治と社会全体を「劣化」させる。

ここで歴史的教訓を思い起こさねばならない。それは、ドイツ国民のあいだに広がった漠然とした不満や不安感を利用して、ナチスが単純で「わかりやすい」解決策に訴え、ドイツ国民の政治的反対運動を巧みに避けながらファシズムを組織したことである。そのとき社会全体を覆ったのは、「反知性主義的」な「思考の短絡化」による「気分の支配」であったと言える。2年ほど前、麻生副総理は靖国神社参拝問題が批判を浴びたとき、いみじくもこう語って問題になった。「憲法は、ある日気づいたら、ワイマール憲法が変わって、ナチス憲法に代わっていたんですよ。誰も気づかないで変わった。あの手法を学んだらどうかね」<sup>5</sup>。麻生が語っているのは、政治的問題点を具体的、客観的に明示せず、人びとに深く考えさせることを避け、理屈や議論を抜きにして、人びとの「気分」を組織するのが一番の得策だ、ということである。

佐藤優はこう述べている。「とくに政治エリートたちは、知性にもとづいた客観性、実証性に拘

<sup>5</sup> そもそもナチス憲法など存在せず、ナチスはワイマール憲法体制のもとで権力を掌握したのだが、この点は本稿での論点ではない。

束されない『物語』を用いたほうが自己の権力基盤の拡大に資するという認識を抱いた場合、反知性主義的傾向を示すことが少なくない<sup>6</sup>。この「物語」とは、権力者の独善的（客観性も実証性もない）願望のことである。そして、その「物語」を支持するのは、理屈ぬきの「気分」である。

格差社会の進行という現実には、そのような理屈ぬきの「気分」の支配を助長する危険性を秘めている。安倍の「反知性主義」は、そうした危険な状況を背景にしながら形成された。しかし、彼の主観的願望は早晚打ち砕かれることだろう。「安保法制」に対して、多くの学識者や市民に限らず、高校生をふくむ若者たちが反対の行動を起こしている。若者たちは、「安保法制」の全体的かつ具体的意味を的確に見抜き、安倍の「物語」を葬り去ろうとしている。

---

<sup>6</sup> 佐藤優、前掲書、17 ページ。